

科学において確実性が発生する契機、技術における確実性と不確実性の関連、生物において不確実性が果たす役割、人間において不確実性が持つ意味を考察した。科学は我々に身近な日常的な事象の予測に失敗している。科学の確実性は、人間が人工的に構築した事象における確実性である。事象そのものの展開の確実性ではなく、人間によって作り上げられた確実性である。技術は、客観事象が操作可能であることを前提とする。客観事象は、自己以外の作用を受け入れる自由度を持つ。技術にとって客観事象は、偶然的な契機の下で展開する規則性のない不確実な事象である。機械は、限られた窓を通してのみ外部世界と交流する閉じた世界である。機械の人工的に閉じられた世界が、外部からの不確実性の侵入を断って機械の確実性を保証している。科学の確実性の例証のように語られる技術の確実性は、客観事象そのものの確実性ではなく、人工物の閉じられた世界の確実性である。経済システムは、完全に閉じたシステムを作ろうとすると経済活動が死ぬことになるから、システムを開いて自由度を持たせることになるが、自由度を持たせると経済主体の創造的経済活動によりシステムとしての機能的確実性を失う。生物における生態系にも不確実性がある。個々の種は、生存を賭けて争っている。争いを止めれば死滅してしまう。争う種にとって、これは不確実性そのものである。生態系の永続的な存続という確実性は、個々の種の争いという不確実性によって支えられている。ダーウィンが言うように、生物進化で生き残ったのは、闘争において強い種でなく、自己を変えて環境変化に適応した種であった。自己の遺伝情報を変えて環境変化に適応した生物種だった。遺伝情報を変えるメカニズムに、遺伝子情報の突然変異、遺伝子複製における不正確なコピー、生殖における雌雄分離などがある。種の存続を保証するのは、遺伝子情報の伝達の確実性だけではなく、遺伝情報の偶然的な変化という不確実性でもあるのである。我々人間の世界には不確実性がある。世界を定立する私という主体による不確実性がある。それぞれの世界を定立している他人という不確実性がある。この不確実性が不安を生み、人間に自由を体感させる。人間は、世界にコミットメント出来たとき、喜びを感じる。コミットメントは世界に不確実性があるとき可能である。不確実性は人間の喜びの源泉である。